
ソラとタイヨウのモノガタリ

KATAKO騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソラとタイヨウのモノガタリ

【Zコード】

Z3081Z

【作者名】

KATAKO騎士

【あらすじ】

この作品は、中二病、葛西祖、音操、ari shi a、聖騎士、赤釘春流の順番で

一話一話を投稿していくタイトルのままのリレー小説です。ジャンルはファンタジーです。

はじめに

あらすじでも書きました通り、この小説は中一病、音操、聖騎士、ペンシル、*archia*、赤釘春流、コノハの一話事に次に回してリレー小説となっています。

文体、表現、などが著しく変わる場合があるので「承ぐださい」。尚、作者共々、読者の方に『面白』と言つて頂けるような作品を執筆できれば、

と思う所存です。

投稿日時、完結、伏線回収、などが出来ない場合もありますので

そこらへんも

「了承ください」。

ちなみに僕は楽しく書ければ、と思いこのようなリレー小説をやらせて頂いてます。

それでは本編をお楽しみください。

まじめ（後書き）

担当は中一病でした。次は さんです。頑張ってください。

1・プロローグ（龍書き）

「でも、一一番手「ペンシル」です。」ソロッド血口紹介をしてもアレなので、よかつたら「ペンシル」に来てください。

では、ほほ一一番手と云ひますが、本編をどうぞ。

1・プロローグ

夢を見ている、と。それだけはわかっている。
それだけがわかっている。

白い世界。いや、白なのか？黒かもしない。いや、そもそも…
…色として表してよいものなのか？

僕は立っている？座っている？回っている？
僕は立っている？座っている？回っている？

見えるものも、見えない。

そこに立っているのは誰？口は誰の夢の世界？自分？そこには立
つている人？誰でもない、ナニカ？

創造し想像することさえ、ままならない。

自分の夢の世界。

ああ、それはわかった。

ならばなぜ、なぜ自由がきかない？

その問い合わせは、口にしたい。

誰かが答えてくれるような、そんな気がする。

夢の世界。自分の夢に縛られた、僕の世界。

その世界に、自分でない、誰かがいる。

ああ、目が見える。目の前に、立っているような誰かがいる。そ
れがわかる

だれだ？

目の前にいる、笑っているこのナニカは、だれだ？

見覚えがない？いや、そんなこともないのか？

ああわからなくなつた。また、思考の泥沼にはまるのか…

と。

体中に激痛が走る！

自分以外の誰かが、僕の体に触れている感覚がある！

だれだ！？

……いや、待て。体があるんだ。

落ち着け。落ち着いて。言い聞かせろ。自分の体を使う術を。思い出せ。聞くことを。見ることを。考えることを。感じることを。

痛みが痛みではないことに気づく。

「あなたなら、できる」

見えて。男か、女か。それは、考えてもわからなかつた。ただ、肩に手を当てられていて、話しかけられていて。

「世界を救えるほどの、力を持つあなたなら」

何を言つてゐる？今度は、考えてもわからないのかつ！？

「自分の力を、信じなさい……信じなさい……信じない？」

ダレが

この白い世界が、天井だと。
気づけば、ただの世界にいた。
確かに、ただの世界にいるんだ。

1・プロローグ（後書き）

いかがでしょうか。「次の人、困れ」の思いで書きました。
というわけで、次回、「音操」さんです。
どう膨らましてくれるのか、期待です。

2・セカイ（前書き）

いつも。音繰です。

前回の人に比べて模写力がダニですが・・・許してください（泣）

さて。本編をどうぞ～

2・セカイ

「そうだ……確かに僕は世界に“居る”。この無意味で面白味の無い……そんな世界に」

そう呟くと、視界に初めて色が付いた。それは開けゴマと言つたら家が開くように。

僕が“僕自身”を知覚したその瞬間…世界は再び動き出した。

まるでパラパラ漫画の様に、色の付いていない部分から色の付いている部分へと切り替わる。

緑一色。どこかで聞いた事のある風景。現代ではもう数える程しか残されていない場所。

草の絨毯とも呼べる場所に、僕は立っていた。無論、一人で。

風が吹いた。髪がなびく。少し肌寒い。既に痛みは無い。上下左右も理解できる。

体の動かし方も支障は無い。

つまり…僕はあの夢から覚めたのだろうか？もつとも、あれが夢であるかさえ僕には知るよしも無い。大体、夢にしてみれば鮮明過ぎだ。

あの理解不能の存在……いや。アレは存在すると言つカテゴリに当てはまるかさえ疑問だ。

最後の言葉は？“力を信じろ？”僕は……

…ダメだ。何も思い浮かばない……ともかく進むしか無い。

歩く。終わりの見えない道を。歩いても歩いても無意味と感じる程遠い道を。ただ、歩いた。

不思議と、疲労した感覚は無い。空腹と飢ひ訳でも無い。足が特別軽い訳じゃない。

心がクリアな訳でも無い。眠い訳でも無い。

“体調が変化しない”… そひ、考へてもいい氣がする。

… 日は、既に一度落ちた。そして、黄金の朝日が緑色の草原を照らす。

「…眩しい」

少しだけ、目を閉じた。風景は、何も変わらなかつた。樹海の中に迷い込む様な錯覚をした。

こんなのはありえない。いや……そもそも、リリカルだ。

…あの口元に氣を取られ、初めてその答えに辿り着いた。

「リリカル…そして…僕は…」

ビーハーヒーハーにも……冷静なのはなんでだらう。まるで、今が“
とも当然の様だと”。

…何故、そう考へて居るのだろう。

「けど、その問題には誰も答えてはくれない。だから、進むしか無い

い」

そう。進むしか無い。終わらなくても。ただ、進むしか無い。

また、一步。足を踏み出す。恐怖が無いかと聞かれれば嘘になる。希望が無いかと言えば嘘になる。でも、なんでだらつ？

同時に……このまま先を進めてはならない。そう感じるのは……一体なんだだらつ？

まあ……。

「――どうでもいいからそんなジマラナイ事は」

2・セカイ（後書き）

お次の更新は a r i s h i a さん！！！ ちなみに、今の俺の中では・・・何もありません。

後、少し冷ましそぎた気もします。・・・混乱したら口調荒げるとかですかね？

頑張つて下さいね～。

P.S、思つたんですが・・・こ れ へ た に せ ん と
う い れ る と し ぬ

ではではッ！！

3・孤独（前書き）

四番バッター「A r i s h i a」ホームラン打てません！

とりあえず、この小説で一番長いタイトルになるのを願いつつ……

理由？ ないよ！

3・孤独

言つならば僕は旅人なんださう。

果てのない道を歩き続ける……そこには何の感慨もありはしない
ただ足を進めているという事実があるだけ。

「空っぽみたいだ」

思わずそう呟くと自覚したせいかより空しく感じられる。
何のために存在して何の為に動いているのか……何も分からぬ。
そんなもの人形と大差ないのかもしれない。
一面縁一色なこんな世界を歩くことしかできない人形、ただただ歩
くことなら人形でもできると知りつつそれ以外の事が出来ない。

「本当に……僕一人なのかな……」

僕は駆けた。

何かから逃げるかのように、
何かを追うように。

目的なんてあるわけじゃない。
意思だつてはつきりしてない。
ただただ逃げてるのか追つているのか分からなくなるぐらいに駆け
たいと言う衝動にかられただけ。

人は一人では生きていけないと誰かが言つていた気がする、まつ
たくもつてその通りだ……僕は僕以外に存在しないこの世界に嫌悪
感を……いや、恐怖を感じている。

だけど、同時に期待もしている。

もしかしたら僕と同じような人がどこかにいるんじゃないかということを感じ、早く会いたいと思い、誰もいないと言つ事から逃げるかのように足が動かなくなるまで駆け続ける。

「つあつ！？」

そして僕は転んだ。

何かに引っ掛けたのか、疲れて足が追いつかなくなつたのかは分からぬ。

結局誰にも会えなくて泣きたくなつた……結局一人でいることを知つて悲しくなつた。

「貴方は……世界を救う？」「えつ？」

突然近くで発された声に驚きつつも他の人がいたことを知つて嬉しさのあまり体に鞭打つて無理やり起こす。

そこにいたのは少女だつた。

座り込んで目を合わせているからこそ僕が見上げる形になつているけど立つてしまつたら見下ろす形になるのは間違いないくらいの大きさしかない少女。

「貴方にはそれだけの力がある……だけど、力があるのと使う事は別」

僕は最初に言われた言葉を思い出す。

誰だかわからない存在がそんなことを言つていた。

それはこの少女だったのかと思いつつもすぐにそれを否定する。あの時の声は、あの時の姿は少女とは全く異なるものだった。なら、あの存在は一体？

「選びなさい 貴方の力で世界を救い、貴方の存在意義をその為だけにするのか……世界を見捨てて一人で生きるのか」

少女は透き通った蒼い石を僕に見せてきた。

石と言つより岩の欠片と言つべきだらうか？ 石のよつな丸みを帶びていふと言つわけではなくじつとした表面を見せるモノ。荒々しさの中にどこか優しさや温かさの感じられるモノ……

「世界を救うのならばこれを手に取りなさい」

世界を救うなんて大層な気持ちはなかつた……ただただそれが綺麗で僕が走り回つてでも欲しかつた優しさだつたから手を伸ばしただけ……

それは僕が手に取つた瞬間姿を変え、僕がそれを認識する前に意識を飛ばされる感じに襲われた。

「きつかけは些細なこと……たつた一つの石を水面に投げるだけで波紋は出来る そう、良い事も悪いことも始まりは大したことじゃない。だからこそ、人は悔いるのかな？」

少女はもつ誰も聞いていないこと知りつつ、ただぼんやりと呟いた。

草が少し強めの風で音をたてて揺れると少女はゆっくりと皿をつぶ

つて消失した……始めからそんな存在はなかつたかのように……

3・孤独（後書き）

話の展開を変えないと不味いと思った。後悔はしていない。

と訳すと、「聖騎士」様にそおい！

4 · 製 擊 (前書)

聖騎士 · 著

「“世界”って何だよ！ “救う”ってどうすればいいんだよ！」

僕の叫びは風に紛れて突き抜けるような青空に吸い込まれていく。少女の消えた後にはそのぬくもりさえ感じない虚しい空間がぽつかりと空いている。見渡す限りの広大な草原は、今まで以上に広く感じる。ここが僕の“救う世界”なのか？ いつたい何から救えればいいんだ。僕はどうすればいいんだ？

混乱する重い頭を持ち上げながら、僕は立ち上がる。パジャマ代わりの黒いジャージの膝には、心ばかりの草の切れ端と黒い土が付いている。僕は膝をしつかり払つて周囲を見渡す。

風は右から左へと吹いている。ここが僕のいた世界と同じ物理法則の働く世界であるならば、気圧変化があるということだ。つまり今は雲一つない青空が広がっているが、いすれは雨が降つたり雷が鳴つたりする。太陽は真上より少し左へ傾いている。さつきはもつと低かつた。やはり僕の元いた世界の基準で考えると、今僕は南を向いているということだ。

風は西から東へと吹いている。僕は両手を広げ、位置を確認する。何もない草原は砂漠と同じだ。見渡す限りの牧草は、羊だったら食うのに困らないが、人間である僕には何の役にも立たない。少女が消えてから、僕は若干の空腹と喉の乾きを覚え始めている。とにかくまずは人を捜そう。そしてこの世界について情報を集めなければならぬ。“救う”ためには、まず僕が生きなければならぬ。

僕はひたすら南に向けて歩き続ける。手のひらの中にはあの青い石。ほのかな温かみを感じるのは、僕の体温だけではないようだ。この石があの少女との唯一の接点のような気がして、僕はしつとりと汗をかき始めた手のひらの中に握り込む。その硬さは僕に足を前

に出す勇気をくれる。僕は歩く。風が僕の前髪を揺らし、上気した頬を撫でていく。

ちくしょう、なんで僕は歩いているんだ。何でこんな思いをしなきゃならないんだ。ただ自分の部屋で寝ていただけなのに、何でこんな何もない草原を額に汗して歩かなければならぬんだ。世界を救うならもつと待遇をよくしてくれてもいいじゃないか。

学生時代はよく運動をしていたが、最近は身体を動かす機会も減つていたため、さすがに辛くなつてくる。ゲームばかりしていたつまらない生活でも、今はとてつもなく居心地のよい世界だったと改めて感じる。この世界を救うにじろ脱出するにじろ、死んでしまつては元も子もない。

そう、僕は“生きる”ために歩く。それが今、僕ができる唯一のことだ。

一、二時間は歩いたどうか。真上にあつた太陽も西へだいぶ傾き、風に湿り氣を帶びてくる。地平線しか見えなかつた草原の向こう、うつすらとした灰色の影が見えてくる。どうやら山の稜線のようだ。山があるなら木や水があるはず。確証はないが今はそう信じるしかない。僕は心持ち歩調を早め、さらに一時間ほど歩くと、きらきらと陽光を反射する小川に突き当たる。対岸には木が立ち並び、その向こうは少し傾斜して丘に続いている。起伏のある地形が、こんなにも新鮮に目に映るなんて初めての経験だった。

「み、水……」

僕は小川に飛びつくようにして顔をつける。鳥肌が立つように冷たく感じたのは、僕の体温が上がつていたせいだろう。不用意に飲んだりしてお腹を壊してもいけない。とりあえず青い石をポケットに入れ、汗ばんだ顔を水で洗つて頭を濡らす。小川は整地されていない自然のままの姿だ。テレビの中でしか見たことのない美しい自

然。目の前には雄大に隆起した丘と、その遙か向こうにそびえる山々。一息つくとこの世界がいかにすばらしい世界なのかがわかる。

「とにかく人を捜さないと」

ひと心地ついたことで、僕は当初の目的を思い出す。“歩く”的次は“捜す”だ。RPGだつたらコマンドを選択すればいいが、今は僕の頭で判断し、僕の身体で行動しなければならない。コントローラーの指ですべて進んでいく世界じゃない。僕は素足を小川に差し込んで、ゆっくりと渡る。水深はさほどではないが、多少流れがあるため太ももまで捲つたジャージの裾に水が跳ねる。小川を渡り切ると、僕は傍らに立つ木に手を着いて、ジャージの裾を戻す。タオルがないので、濡れるのは仕方がない。水で張り付く脛に顔をしかめながら歩き出そうとすると、遠くに人影が見える。男か女かわからぬが、とにかくあの少女以外では初めて見る“人”だ。

「おお～い！」

僕は嬉しくなって走り出す。何度も大声で呼びかけながら、大きく手を振る。助かった。とにかく何か食べ物を分けてもらおう。それにちゃんとした服や靴も。そしてこの世界の情報を集めよう。何せ僕はこの世界を救う存在らしいから。

「おお～い、おお～い！」

黒い人影が身動きする。僕に気づいたようだ。

「おお～… いいつ？」

人影はいきなり空中へ飛び上がる。そして急激な角度で曲がり、

僕の方へ飛んでくる。それは人間ほどもある巨大なスズメバチだった。

「うわあ！」

僕は元来た方へ走り出す。不気味な重低音が背後から迫り、僕は恐怖で頭が真っ白になる。ポケットの中では、青い石がほのかな光を発していた。

4・襲 撃（後書き）

次回赤釘春流様です。
よろしくお願ひいたします（*^-^-*）

5・戦線蒼々、少女は笑む。（前書き）

「つおおじ？（・・・）

無茶振り k t k r w w

ども、赤釘春流です、力不足だとは思いますが、何とか書くことに
します。宜しくお願ひします（ゝゝ）

5・戦線蒼々、少女は笑む。

走る、走る、走る。風が心地よいのが逆に腹立たしい。後ろから追つてくるのは何だかよく分からない巨大なスズメバチ。

スズメバチかどうかは定かでは無いが、確かにそれは、元々僕が居た世界の生き物と酷似していた。変わるのは只、大きさのみ。「追つてくんよ！」

走りながらそう叫ぶ。しかしながら、スズメバチは止まらない。その羽を仕切りに動かしながら、僕に近づいてくる。全速力で走る物の、中々スズメバチとの距離に差は出来ない。

「キシュシャシャシャシャシャ……」

スズメバチは、顎をモゴモゴと動かしながら口から何かを吐き出した。

「あつぶない！」

僕は何とかソレを避ける。

胃液のような黒い物体は、地面に当たつた途端『ジュウ』と言つような聞きなれない音を発して地面の土を50センチほど溶かした。

「 つ！」

僕はソレを見て驚倒する。そして。

「そ、そんなのありかよおおおお！」

さらに足に力を込めて走り始めた。スズメバチは、毒の第一発目を放つべく、再び口をモゴモゴとしている。

何？コレ何？なんで僕はこんな不得体の知れない化け物に襲われてんの？僕、何したの！？と自分に何度も問い合わせるが答えは見当たらない。

そして、そのスズメバチは毒の第二弾を発射しようとした。

くそっ、このままじゃ殺されてしまう！何か武器は無いか？棒でも、石でも構わない！何でも良いから対抗できるような武器

を。
。

ふと、偶々ポケットに手が触れた。そこには、膨らみがあった。ポケットに手を突っ込んで、その膨らみを取り出してみる。ポケットにあつたのは。

「……」

蒼い石。

「これだ！」

何か、世界を救う事が出来るとか言つ大それた石らしいけれど……。

いつ言つ時は、仕方無いよね？

「つまおおおおおおお！」

振りかぶつた。そして身体を捻り、回転のパワーを腕に持つて、指先に力を集中させる。

投げた。

全力投球、食らえ。スズメバチ

野球など一度もしたことの無い僕にしてみれば、恐らく上等な方であろう弾を投げたはずだ。

そう、時速に換算すると。80キロ！ 当たれば地味に痛いだろう。

その時速80キロの剛速球は、見事にスズメバチに向かっていき、そして。

見事に外れた。

「……」

やつぱりか。

「キシユアアアアアア！」

「嫌ああああああ！」

死ぬ！死ぬ！絶対に死んだ！1秒後には死んでいる。うわ、

短い人生だつたな。

まるで走馬灯のように今までの人生が脳裏に流れしていく。走馬灯のようにな。

最悪の人生だつたな……。

「キシヤアアアア！」

「……」

でも、でも死ぬのはやつぱり……つ！

「嫌だああああ！」

僕は、身を屈めてそう言つていた。怖かつたのだ。自分の存在が消え去つてしまつたことが。自分と言つ存在がなくなつてしまつたことが。

瞬間、轟音。

一瞬、大地が揺れてしまつたのかと思うほど大きな音だつた。

「え……？」

僕はふと顔を上げる。そこには、スズメバチの残骸があつた。グシャグシャになつて、スズメバチであつたのかすら分からない。とにかく、バラバラになつていた。

「……え？」

僕は、状況がよく理解できていない。なぜ、このスズメバチの化け物は死んでいるのだろう？ それも、こんな粉々の状態で。

「……」

考えてみる。しかしながら、何も思いつかない。

ふと。

「おいおい」

後ろからそんな声が聞こえた。

「つ……！」

僕は警戒して背後を振り向いた。そこに居たのは、少女だつた。金髪の少女で、とても愛らしい顔立ちをしている。子猫か子犬のような瞳を、強気な風に僕に見せ付ける。短パンと言つ、とてもラフな格好だ。

また、胸元に包帯を巻いている。半裸に近い格好だ。

少女の右手に置かれ、肩に立てかけられている長い筒のような物の先端からは煙が吹いていた。

「……」

僕が呆気に取られていると、少女はいきなり僕の元にツカツカと

歩いてきた。そして言つた。

「蒼石そうせきをあんな風に乱雑に使うな」

そう言つて、僕に蒼い石を渡してきた。

「あ、ああ……」

「返事は!?」

「えつ？ あ、うん……。分かつた」

僕がそう頷くと、その少女は鮮やかな微笑みを僕に見せた。

「宜しい」

だ、誰だこの女は……？

5・戦線蒼々、少女は笑む。（後書き）

じゃあ、コノハ s 宜しくお願ひします v > w < v
そして、かなりふざけてしまいました。すみません（笑）
それから、フラグを叩き割つてしまい申し訳ないです、書いた後に気づきましたw
上手く繋げて下さい、お願いします（懇願）
では^ ^

6・罪深き能力（前書き）

コノハです。他の作者様と比べて著しく描写力、構成力にかけます。他の作者様方、迷惑掛けるかも知れませんが……。

6・罪深き能力

「さて、まずはお前が持つ疑問から答えていこうか」
短パンにサラシというラフな格好の少女は、やはり口調もラフだった。彼女が肩に担いだ筒……これが何か、僕は知っている気がする。ただ、今思い出せないだけで。

「え、あ……」

「この武器は『ロケットランチャー』といつ。知っているはずだ」

「え、あ……そういえば」

確かに、そんな名前の武器だつた気がする。でも、どうしてこんな草原ばかりで科学の『か』の字もないような場所で、こんな少女が……？

「だが、甘い。発射機構も照準も弾薬数も何もかもが『デタラメ』だ。こんなもの、使って一発、運が悪ければ不発だつたぞ。……聞いているのか？　お前は一体どんな記憶をしているのだ？　たしかに『果てしない火力の重火器』という名前で私は生まれたが、いくらなんでも基本武器がこれではあんまりだ。もっと基本を押さえて、マシなフォルムと威力をだな」

戸惑う僕をしり目に、目の前の少女はぶつぶつと不満を言い続ける。え、何この子。なんでこんな風にあたかも『僕のせい』みたいなことを言つてるの？　え？　まるで、そう、僕がこの子の武器を生み出した見たいな

「なんだ？　不思議そつじゃないか。言われなかつたか？　『力がある』と

「い、言われた……けど」

言われたけど、それがなんだつて言つんだ。事実、僕は巨大な虫でさえ、倒すことができなかつた。……それなのに、世界を救うなんて、無茶すぎる。

「お前の力が何か、お前は知らないのか？」

少女の問いに、僕はうなずく。

「ほう。それは意外だ。こういう勇者は自身を自覚しているものだとばかり……いや、これもお前の偏見か？」

さつきから少女が何を言つてゐるのかさっぱり分からぬ。

「来た道を戻るぞ」

「へ？ なんで？」

もしかしたらまた、巨大スズメバチがいるかも知れないのにどうしてわざわざ戻ろうなんて……。

「水がいるだろう。私は大丈夫だが、お前はそうではない。食わねば吃える、飲まねば渴く、寝なければ狂う。その程度のことも理解できぬほど愚かではないな？」

うなずく。そりや、僕だつて食べなきやおなかすくし、今だつて水は飲みたい。けど……。

「……はあ。まったく、臆病な奴だ。さきほど私の活躍を見ただろ？ たとえ一個大隊で押し寄せてきても、退けてみせる」

「……？」

一個大隊？ 何それ。

「……軍事知識はなしか。それでよく私を……」

「何か言つた？」

「……あとで教える。とりあえず立て」

少女に手を引かれ、僕は立ち上がる。何か足りないと感じて、すぐには思い出した。

「あ、蒼石が」

投げてどこかへいつてしまつたんだ。探せる、かな。僕はしゃがみ込み、周りの草をかき分け石を探す。

「……お前が探しているのは、これが？」

「え？」

少女の手に握られていたのは、まぎれもなく、蒼石だった。

「あ、そ、それだよ！ 返して！」

「効能も意味もわからないものを、持つていて意味があるのか？」

「それともお前、レア物はとにかく蒐集するクチか？」

「そんなんじやないよ！ 大切なもののなんだ！」

「……ふん。まあ、いい。私が教えてやるからな。ほら、大事なものなんだろう？ しつかり保管しておけよ」

荒い口調とは裏腹に、少女は僕のところまで歩いてやってきて、蒼石を手渡してくれた。僕は立ち上がり、石を受け取る。

「……水辺へ行くぞ。食料はなくとも水さえあれば命は繋げる。

「……」「いい」

「わかったよ」

いきなり現れた少女に命令されるのを不思議に思いながら、僕は少女についていく。向かうのはさきほど見つけた小川だ。

「……あそこの水、飲めるの？」

おなかを壊すんじゃないかって思って水は飲まなかつたのだけれど……。

「飲めるさ。最初は辛いがな」

「……え」

「最初は腹も下すかもしれん。が、最初だけだ。その水を飲まねば『死ぬ』と身体が判断したら、勝手に慣れる」

「も、もしその最初で脱水症状起こしたら……？」

「死ぬにきまってるだろう」

「そんな危険なことできるか！」

「なら、死ぬか？」

僕は言葉が返せなかつた。少女は足を止め振りかえり、僕の手を取りつた。

「不安なのはわかる。死にたくない、というのもわかる。私だってこの世界に何があるのか知らない。もしかしたら、あの水を飲めば死ぬかもしれない。が、飲まねばいずれ死ぬのだ。私だって、あの水を飲むのには、勇気がいる。……お前は、たかが水、と笑うか？」

？

僕は首を振った。少女はそうか、といつて踵を返し、また小川に向かつて歩き出した。

「私は水を飲む。が、お前は好きにしろ。飲んで腹を下し、脱水症状に陥つて死ぬか、水も食料も口クに見つからんこの世界で、まだ見ぬ飲食料を探して歩き、その果てに死ぬか。……今私が想像している未来は、その二つだ」

「ずいぶん辛氣臭い未来だね」

「……まだ、生まれたてなのだ。明るい未来と言うのが想像できん」

「え？」

「今度は、ちゃんと聞き取れた。生まれたて？ 一体何を言つているの？」

「……一応、説明に入るか。そうでもしなければ、お前はこの先、ありもしない『潜在能力』にすがることになりそうだ」

呆れるように言つて、少女は僕の手を見つめる。……正確には、僕の手の中にある蒼石を。

「その蒼石は、お前の能力を確立する『サポーター』だ

「……僕の能力？」

そう言えば、僕には『世界を救う力がある』とかなんとか。

「正確には、私もわからん。が、お前が強く望み、強く所望したときその力を投げれば……それはお前の意思通りに、形作られる」

「……？」

つまり、何かを作れる能力つてこと？

「まだわからんか？ お前の能力は遙かに強力だがお前は弱い。お前』ときが炎を操つたり世界を救う力を直接持つたところで、何も出来やしない。そこで、私たちが必要る」

「……君『達』が？」

達つて、どういうことだろ？

「私はお前が先ほど望んだ、『武器がほしい』といつ意思に呼応して作られた、お前の『サポーター』だ」

下唇を噛みながら、少女は言った。その表情は暗く、親の仇でも見るような目で石を見ている。

「……ど、どうしたの、怖い顔して」

「どうしたの、だと？ これがどういう意味かわからないのか？ 私はお前の『サポーター』だ。世界を救うために『造られた』、いわば人造の人間だ！ 私には武器の知識を主に、お前をサポートするためのあらゆる知識がある。それがどういう意味かわかるか？」

？」

歩みを止めず、それでも怒鳴るよう、少女は言つ。

「私はお前のための存在だ。自意識もある、人格もある、自由意志もある！ それなのに、私の存在価値は『お前の道具』なんだ！ お前のために生き、お前のために死ななければならない！ 私はこの先あらゆる場所で、お前のために戦わなければならないのだ。……この気持ちが、生まれながらに他人に従属させられる『物』の気持ちが、お前に……！」

そこまで言つて、少女は怒鳴るのをやめた。力なくうなだれ、絶望したように歩み続ける。

「……悪かった。お前に言つても、仕方なかつたな。すまなかつた」

僕は、何も言えなかつた。少女の言つていることが何一つ理解できなかつたからではない。理解できたからこそ、何も言えなかつた。僕が、この子を『造つた』。だからこそ、僕は何も言えない。確かに、僕の能力は強い。世界を救うことも容易いだろう。……けど、僕は新しい能力を使おうとするたびに、こんな風に悩んで、苦しむ人間を生み出すのか？

そんのは、嫌だ。

「……僕は、君を……」

「なんだ」

「……違つた。君の名前を、決めないとね」

僕はこの能力を使いたくない。それなのに、この先、僕の能力が

必要になることがわかる。……この少女のよつたな人間を生み出してしまったことがわかる。

「……名前、か。……そうだな」

少女は悲しげな微笑みを浮かべていった。

「どうするのだ？『奴隸一号』にでもするか？ふふふ……」
ものすごく自虐的になつていて。僕に能力を説明するまではこうじやなかつたのに、どうしてだらつ？

……もしかして、この子が能力云々気付いたのつて、説明しようとした時なんじやないだらうか？僕に説明をしようとして、そして初めて、僕に生み出されたことの意味に、気づいたんだ。

「そんなことしないよ

やはり、僕の能力は強い。けど、罪深い。……できることならもう、一度と使いたくない。

「ならば、どんな名前にするのだ？」

「……そうだね、君は

僕は、少女の名前を言つた。

6・罪深き能力（後書き）

お読みいただきありがとうございました。無茶な設定＆無茶な展開、無駄にシリアスという三『無』 そろつた私でした。

ではでは、お次は中二病さん……で、よろしいんですね？

違つていたらどうしましよう……？ それでは、失礼します。

間

『キャラクターの名前を入力してください』

7・一人の名前（前書き）

7番、バッター。チュウ・ニビヨウ。

：7番というのが僕の位置をよく表してますね（笑）

今回の文ははつきり言って糞です。

謙遜ではなくマジです。……出来るだけ頑張って書きました。

7・一人の名前

「ハハハハハハツ！」

僕の考える限りで出した名前に少女は笑う。……その態度に少し僕はイラついた。

笑うのを辞めると、またいつもの端正な顔付きへと戻る。

「……すまないな。君のネーミングセンスに少し笑ってしまった」少女は弁解するかのように言つたが、少し嘲笑が込められていた。僕が少女に付けた名前、それは

『ソラ』

クールで人格のある彼女には相応しいのではないか、と思い付けた名前。

蒼石の色にも掛けている。

「……結構、良い名前だと思つんだけどなあ」

僕が落ち込む仕草を見せると、

「まあそんな落ち込むな。あ。そうだ、まだお前の名前を教えてもらつてないな。教えてくれないか？」

その質問に少し僕は押し黙る。……あまりされたくない質問だつたんだけどな。

「僕の名前……？ ああ……。忘れたよ。正確に言えれば記憶に無いと言つた方が正しいかな」と

「……それは何故なんだ？」

ソラは急に凛々しい顔になり、僕に尋ねてくる。どうやら僕に深い事情がある事を悟つたらしい。

「僕はね……ある日夢の中で言われたんだよ。『君は世界を救う存在』とか宗教染みた事を言われてね。

その時、僕は何を言つてゐるんだ？ みたいな感じで受け流してた。どうせ夢だろう、と。

そして僕が起きた時にはもう

「　　全て記憶が無い、と」

「いや違うよ、ソラ。『夢』の中の詳細だけは全て覚えてるんだよ。

面白い事にね。

……だからね、ソラ。君の気持ちは良く分かるんだよ。僕も道具なんだ。

世界を救いだす為だけに使命を負わされた、ただの不運な人間、それが僕

「そうか」

「だから僕は旅をしてるんだ。それが僕の『答え』を出すためだと思ってる」

「……すまなかつたな。ついお前の事を知ったかのような口を聞いてしまつて……」

「いいよ、そんなの。気にしてないから

嘘だ。本当はいつも気にしている事なのだ。自分が何処に住んでいたのか？

名前、自分の詳細、全て分からない。全ては闇の中。

そういう所はソラと一緒に唯一無二の存在。

「だからさソラ……。このセカイを作り出した神にさ……」

「　　僕たちは『道具』じゃないって見せ付けてやるつ

僕のこの豪快な発言にまたもやソラはニヤリと微笑む。心なしか

物凄い嬉しそうだ。

「ふふふ。今日一番のギャグじゃないか？」

「……どうせ僕のギャグは面白くないよ

そしてソラは立ち上がり、僕を見下ろす。

「休憩したから行くぞ。タイヨウ

「どうしたの急に？　太陽になんか話掛けちゃって……まさかそれ

僕の名前とか？」

「そうだ。お前にも名前がないのだろう？　だから私も名前を付け

てあげたのだ。感謝するがいい」

何か物凄く偉い事をしたような態度。……僕は低い声で呟く。

「……ネーミングセンス」

「何か言つたか？ タイヨウよ

物凄い凝視してくる、ソラ。その眼は、『変な事言つたら殺すよ？』みたいな視線で満ちている。

「いや別に……ハハハハ」

僕は力なく笑う。

その時、森の静寂を破るかのようにカラス達が空へと消える。後方で何かが飛んでくる音がする。それも一匹じゃない、最低でも三匹。

すぐに何が飛んできているのかは分かつた。

先程の化け物と称してもいい、大スズメ蜂の総襲来だつた。

7・一人の名前（後書き）

……ここまで読んでくれてマジで感謝です。

僕の文で読者の皆様の中に

『中一病いらなくね？』みたいに思われる方も居られると思います
が……

暖かい……それでいて生ぬるい田で見守つてくださいるとあつがたい
です。

次は『ペンシル』さんです。

僕の駄文ではなく、さんの文を読んで田を潤してください。
それでは see you again!!

8・再び（前書き）

のターン！ふ……伏線が来るよう、状態じゃなくてよかつた。

「嘘だあッ！」

「現実を見ろ！ 襲い掛かつてぐるぐる…」

戦闘開始！

みたいなことにはならず。

僕のコマンドは「逃げる」の一択だけ。

「タイヨウ！ 逃げるな、前を見ろ！」

「無理です！」

走る。走る。ソラを小脇に抱えながら、全力で走る。

「ええい、離せ！」

「ツ！」

痛い、噛み付かれた。なんだこれ、僕誘拐犯みたいじやん。

「バスーカドーン！」

「ええええええええええええええ！」？

バズーカでドカンドカンと撃ち落としまくる。もちろん、頑張つてるのはソラだ。

「ちつ、弾切れだッ！」

「これ、使う？」

「タイヨウはさつきの話を聞いていたのか！？」

僕が取り出したのは、蒼い石。先ほど投擲し、拾つてもらつた石。

「ふざけるな！」

「ふざけてないよ。世界を救うのに必要なら、今、使うべきものだ。僕らが生きなきや、世界は救えないだろ？？」

その間にもハチの大群は襲い掛かつてている。ソラがバズーカを振り回して応戦している。いや、バズーカの使用方が間違ってるから。そして、どういう腕力してんの。

「くそつ、逝けやこの虫共オオオオオオ！」

バズーカに装填された弾はハチの大群の中心に飛び、炸裂した。

「オオオオオン……オオオオオオン」

ハチの鳴き声が聞こえる……鳴き声？いいのか、鳴き声で。

「ホホ……お見事」

不意に、新たな声がする。ソラがまた、バズーカを構えた。
「どうも始めまして。幸せを売る行商人です。落し物ですよ。……」
行商人を名乗る……男、か？大きなバッグを背負い、揉み手をしながら笑っている。

その手から、先ほど炸裂したはずの、石がてきた。

「その石の真の使い道は先ほどのものとは違います……信じなさい」

なんだ、コイツは。僕は顔だけソラの方を向いた。

ソラは震えていた。

僕にはそれだけでわかる。

「おや、お嬢さん。怪しいと思っていますか？ 幸せが訪れますよ、信じなさい……」

「アンタ、何者だ！」

「私は幸せを売る商人です。とある目的があるのですが、生憎この世界に迷い込んでしまいましたね……この世界を救える少年よ。島を出なければ、島を壊しなさい。そうしなければ、あなたはこの世界の泡となる。信じなさい……」

「おいつ……」

「私に会つたことがあると思つのなら、それは夢のまた夢と同じなさい。……ああ！ この世界は、あなたの夢なのでしょうか。あなたに創造の力があるのはなぜ。では救うべき世界は……」

自分の世界にでも入っているのだろうか、コイツは。且が、僕やソラを捉えていない。

「ホホ……ナンナノデショウネエ……」

ふと、我に返つたように、行商人がこちらを睨んだ。
「その石。手放さないよう気をつけなさい。さもなくば、災いがありますよ。信じなさい……信じなさい……ホホホ、ホホ……」

行商人が、消えた。

がくん、と。

ソラが地面に着く。

「なんなんだ……あれば」

僕が呟いたのか、ソラが呟いたのか。
わからない。

「ホホ、早くしてください……終われば、こんな世界、……とつとおサラバしちゃいますから……ホホホホ……」

僕はどうすればいい。
わからない。

8・再び（後書き）

音操さん、次よろしくお願ひします。

どつも～。音繰です。あ、今回正直アレです。すいません。

後、 もん。俺にどうじるとい？ まあ、こいつなりました。

一体なんだつたんだ? わからない。アレは一体……? 今感じた悪寒は? そして、 “ 災い? ” “ 島を壊せ? ” ……ダメだ。とにかく…。

「ソラ!! 大丈夫?」

「ハア…ハア…」

今はこっちを何とかしないと……!!

「大丈夫?」

「…ああ」

近づいて、ソラに手を伸ばす。ソラはその手をやや悔しそうな表情で掴むと、立ち上がった。

やや息が荒々しい。けど、それももう直ぐ収まりそうだ。よかつた…。

「すまない…」

申し訳なさそうに言ひソラ。でも、それは間違いだ。

自分も、動けなかつた。体が凍り付いていた。それが恐怖なのかさえもわからない。

何故なら…思考まで凍て付いたから。…アレは “ 化け物 ” だ。僕達 “ 人間 ” とは永遠に分かり合えない。…不思議と、そう感じた。

「そんな…謝る事じやないよ。それよりも…なんなんだよ。さつき

の奴は

「…わからない。だが、わかる」

「え？」

「アイツには“関わってはいけない”。何があるいつもだ……！」

「…ソラフ？」

自らの呼び出された理由の時の様な怒りでは無い。…本当に生理的に受け付けられない存在に対する怒り。無条件で湧き上がる殺意。ドス黒い感情等田では無い。それは既に“色”ですらない。色と表せる程理解しやすい物ではない。

…とにかく、なだめないと。

「…僕もそんな事はわかつてゐる。アイツは理解出来ない。存在としてね。だから……」

「…タイヨウ？」

「理解しなくていいよ。今は…まだ」

不思議だ。アイツの事を考えるだけでイライラする。…やめよつ。

「おい。どうしたんだ？頭でも打つたか？」

「そんな事ないよ。さあ、行こうよ。あの化け物が来る前にや。一々あの耳障りは羽音を聞いていたら耳が痒くなる」

「おいおい…なんだそれは？」

「ははは…どうでもいいじやん」

そして、ここに来て初めて気づく。ここはまだ草原だ。そして、さつきの戦闘を行つた時に村の様な物が見えた。けど…。

「…ロケットランチャー持ったまま村に入るって。世間一般から見てどうよ」

顎に手を当て、やや気まずそうな表情を浮かべるソラ。…ですよねー。僕がそんなの見つけたら包丁構えて「斬刑に処す」とか言いかねないし。

「…超が付く程の不審者だな」

「やつぱり？… そうだ！！ これは野球のバットですかは？」

「この世界に野球があるかどうかわからないだろッ！－！それと、黒光するバットって何だ！？」

あ、そつか。黒光するバット？…アレだよ。アレ。ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲だよ。まあ、それはどうでもいい。

……じゃあ……これは?

「ホームランバー チョコ味とか」

「それはアイスだろ！？」

「まあね。取り合えず行こうよ」

「やなこつたつ！－さあ、大体もうすぐだ！－走るよ！－」

村の方へと走りだす。後ろからはすっかり元気になつたソラ。うん

！！元気が一番だね。
：それにしても。

ポケットから蒼い石を取り出す。

けど、その石は僅かに変色していた。水晶の左端が、使う前に比べると違っていた。

光輝く蒼では無い。——それはさながら藍色の様な……限りなく黒に近い青色へと。

お次は・・・ a r i s h i a さんですかね。頑張ってください www

後、ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲
は画像検索でググれば出てきます（多分

後、最後のコレは・・・シリアルスな文が書きたかっただけなので w
www別にへし折っても全然いいですよ www

() ズエアズエア

・・・ハクメンとかわかる人いるのかな。ほんと

10・別に……おえてネタでいつも構わんのだらう。(前書き)

Arrishiaです……

タイトルで言つていのせど画面ではないのです……シリアルな空気を壊してすんません。

10・別に……あえてネタでいっても構わんのだろう?

「野球をしよう」チーム名はリトルb「人数が足りないだろ」最後まで言わせてよ……

「

「はい、タイヨウです。現状の報告をいたしますとRPGとかでいう村一步手前と言った所

で例の物……78%、ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲。22%

、野球のバットで構成されているこれの処遇についてだ。

「なんなんだ、その微妙な比率は……」

「地の文に突っ込みはよくないと思します」

「……お前達何をしているんだ?」

村人Aに遭遇した!

「まあ、村の前で不審物持つて騒いでたら気になるよね?」
「ここはノリと勢いで誤魔化そう。

「たのもつー 私達はこの村で一番強い野球チームに挑戦しに来た！」

「結局それなのか……と言つよつ野球があるかどうかも分からんだわ！」

「ま、まさか！ あの「何だかよく分からぬけど」とりあえず強いな～チーム」か！？」

「あるのかー？ と言つよりチーム名が長すぎだらう！… 第一私達は一人しかいない！」

「！」

「何を言つているんだ？ 相棒……俺達が組めば守備なんて必要ないだりづ？」

「くつー！ あの噂は本当だつたのか！！」

「どんな噂があつたんだ！？」

ソラはノリと勢いに任せるのが苦手らしく……僕がフォローしなくちゃ！

とりあえず僕はソラの肩を掴んで大きく揺さぶりながら、

「相棒！ あの時の暑い夏の戦いを忘れたのか！？ 甲子園で汗と涙を流したあの熱い心

はどこに行つたんだよーー！」

「そんなものは知らん！」 と言うより野球なんてしたことはない！

「それだけ厳しい訓練をしたと言う事か……クツ！ 泣かせるねえ！ もしかしたら熱！」

相手になるぜ！」「プレイをすれば思い出すかもしねえ！俺達のチームでよければ

ヤバい……このおっちゃん良い人すぎる……

優しすぎて涙が出てきた。

「私が！？」
「私が変なのか！？」

「ソラ……大丈夫。俺達の最強バツ テリーは不滅だ！」

「良い話じゃねえか……待つてろよー。今すぐ用意してやるーー！」

ソラは興奮状態からなかなか醒めなかつたが無理やり村に無事に入れたと言い聞かせて落

ち着けていた。

まあ、僕自身もは入れただけで良かつたけどやつぱり乗ってくれた
からには乗らないと失

礼だよね？

と言つわけで急遽野球をすることになった。

不思議なこともあるものだね！

「本当に一対九でやるなんて……」

「大丈夫だよソラ！ 諦めたらそこまで試合終了だよー。」

「それは野球じゃないでしょ……」

「いやとなればネオアームストロングサイクロンジョンジョンアームス
トロング砲を使えば大

丈夫！」

「本当にこれは武器だったのかー！？」

ソラはもう少しノリと勢いを身につけるべきだと思う。
そんなことを思いながら試合開始のゴールを待つた。

「プレイボール！」

10・別に……あえてネタでいつても構わんのだらう? (後書き)

肝心のネタを放り投げるという酷や……次は「聖騎士」様かな?
本当に申し訳ありませんでしたああーーー!

「起きる、おい！」

荒々しく揺さぶられ、僕ははっと目を覚ます。目の前にはサラシを巻いた金髪の少女。「ソ……ラ?」

「ああ、私だ。ひどくうなされていたぞ」

僕は頭を一つ振つて周囲を見回す。うつすらと山の稜線が白んでいる。まもなく夜明けだ。

「うなされてた?」

「まあ、時々笑いも混じつてたがな」

口の端を心持ち上げる仕草がこの娘にはよく似合つ。巨大なズメバチに襲われ、得体の知れない行商人に出会つてからというもの、どうにも僕の心はかき乱され続けている。テンションが上がつたり下がつたり、さつきみたいなわけのわからない夢を見たり。何が野球だ。

「今日にはたどり着けられたらいいな」

「ああ」

ソラの差し出す固い肉にかぶりつく。ほんの少し見えた村へ向かって歩き始めて三日、僕たちはまだ森の中を彷徨つていた。あれは確かに人工物だった。僕の見間違いなんかじゃない。それほど遠くに見えたわけでもないのに、一向にたどり着かない。何かに化かされているような気持ちだ。

幸い、ソラのおかげでまだ僕は生きている。敵に対してもそなだが、生きるために必要な知識や技能を、ソラは確実に身に着けている。まさに「サポーター」だ。森を駆けめぐり野生のウサギを捕まえてくれる。木の実をくりぬいた水筒に湧き水を汲んでくれる。原始的なやり方ではあつたが、錐もみ棒で火も起こしてくれる。

サバイバルテクニックつていうのかな。ソラには僕に欠けている技能がすべて備わっている。それもきっと「サポーター」の力なの

だろう。

「なあ、 “島” ってなんだと思つ?」

その単語を口にすると不快感が蘇る。「島を出たければ、島を壊しなさい」とアイツは言つた。単純に考えれば今僕たちのいるここが“島”で、ここを壊せば脱出できるということだ。ただ単に壊すだけならこの石を使えばいい。僕はポケットの中の「サポーター」を握りしめる。こいつをぽんと投げて核ミサイルでもぶちかませばいい。僕には使えないが、キムなんとかつてデブが出てきて赤いスイッチでも押してくれるだろう。でもそれでは僕やソラまで死んでしまう。何かカラクリがあるはずだ。

たどり着けない村。“島”的謎。巨大なスズメバチ。「サポーター」という僕の能力。

寝ている間に連れて来られたこの世界には、僕でなければならぬ理由があるはずだ。まずはそれを探さなければならない。火の始末をしているソラを見ながら、僕は立ち上がる。

「もう出発できるのか?」

この世界で唯一心許せる存在。この娘とこいつして旅を続けるのも悪くない。けれどもそういうわけにはいかないだろう。いや、そうさせてはもらえないだろう。朝靄に煙る森を、僕たちはまた歩き始める。今日もまた一日歩き回つて終わるのだろう。そんな僕の怠惰な思考は、半日もすると大きな間違いだつたことに気づく。

「タイヨウ、あれ見るよ!」

ソラが緩やかに傾斜した林間を駆け下りていぐ。その先に見えるもの…… 海だ。

「わあ、タイヨウ、これが“ウミ”ってヤツか?」

切り立つた崖の上で、ソラの金髪が海風になびいている。両手を広げ、潮風を全身に浴びるソラは、無垢な少女のよつこいめいて見える。

「ああ、そうだ。これが海だ」

遙か下方数十メートルでは白い波頭が岸壁に崩れ、虹色の水飛沫

を上げてこる。左右を見回すが、どちらも切り立つた崖が続き、森と海と青空しか視界に入らない。

「飛び降りたら死ぬな」

崖から身を乗り出して下方を眺めていたソラは、振り返っていたずらっ子のように笑う。白い鳥が海風に乗って滑るように下降していく。翼があれば飛んでいけるのに。

「あそこに行つてみよつ」

僕は少し南に見える岬を指さす。少し突き出た崖壁の先に、青々とした草むらが見える。その向こうは岬に遮られており、よく見えない。崖の上を当てもなくひたすら歩くよりは、たどり着ければその先に何かがあるかもしれないという期待があつた方がいい。

「じゃ、競争だ！」

ソラは足を大きくスライドさせて走り出す。Jのシンデレ娘め。そう心の中で呟きながらも、進展のあつた旅に心が沸き立つのを感じる。

海と島は密接な関係がある。もしここが現実世界でいう“島”なら、あのあやしいヤツの言つたことが少しづかつてくる。飛行機のように両手を左右に広げて走るソラの躍動的な背中を見ながら、僕は半ば本気で追いかけて行った。

11・「カミカミ」とターミナス（後書き）

強引に自分の世界に引き戻しましたw

次回赤釘春流様です。

よろしくお願ひいたしますm(ーー)m

12・黒の少女とピーポ（前書き）

赤釘です^ ^
駄文ですが、頑張ります^ ^

ある世界での物語。

「Jは果たしてビJだらひ? 白と黒と、ちょっとの赤が混じつた世界。

Jの世界に上下左右はなく、まるで無重力体験をしているかのように一人ともフワフワ浮いている。

世界はグニャリと歪みを見せる。絶え間なく赤と白と黒が流動体のようグニャグニヤと動いている。

その眺めを数分間見ているだけで、平衡感覚がおかしくなりそうだ。

「ホホホ……」

ピエロのような鼻をしている赤髪の男は笑った。ピエロが手に持つてているのは、あるいは水晶玉だ。水晶玉は鮮やかな光を発しながら、映像を映し出している。

ピエロが見ている映像は、サラシを胸に巻いた半裸に近い女と華奢な肉体をした男だった。一人は、断崖絶壁の岬で潮風を浴びている。

「ホホホホホ」

その様子を見て、ピエロは心底気持ち良さげに笑う。

「相変わらず良い趣味をしているわね」

虚空から声が聞こえる。ピエロが顔を上げるとそこには黒髪の少女が居た。

「覗き見だなんて」

「ホホホ」

ピエロは相変わらず乾いた笑いをする。

「いえね、兄が彼らにアドバイスをしたものですから気になつて」

「……ふうん」

「ホホホホホ」

ピエロは笑う、それに対しても少女は眉をひそめた。

「……本当に貴方達兄弟って似ているわよね、話し方まで。嫌なくらい」

「双子ですか？」

ピエロはサラリとそう告げ、黒髪の少女に問いかけた。

「貴方も見ますか？」

ピエロは、水晶玉を少女に差し出した。

「ええ」

少女は即答した。

「おや？ 覗き見なんてゲスなことは嫌いなのでは？」

「知的好奇心には勝てないわ」

「ホホホホホ」

ピエロは意味もなく笑い続ける。それから、少女は水晶玉に映つている男女を見た。

「ふふつ」

少女は笑みを零す。それを見て、ピエロはシハラシハラと言った。

「貴方も残酷な人ですねえ」

「そう？」

少女は首を傾げる。その少女に、ピエロは聞いかけた。

「貴方はいくつ、『世界』を破壊するつもりですか？」

「ううん……」

少女は考え込む。

「1万くらいじゃないかしら？」

「ホッホッホ、では。何人くらい殺すつもりですか？」

「そんなの分からぬわよ、でも、精々10兆人くらいじゃないかしら？ よく分からないわ」

「貴方はなぜこんなことを？」

「暇つぶしよ、悪い？」

「ホツホツホツホツ」

ピエロは笑い続ける。

「そんな貴方が大好きです」

「ありがとうございます、私は貴方のこと嫌いよ」

「ホホホホホホホ。正直な方です」

ピエロは口角を不気味に上げる。少女は嘲笑氣味に言った。

「そもそも現実的に考えて、『何でも願いを叶えられる』なんて、そんな都合の良い話があるはず無いじゃない。ねえ？」

「そうですねえ」

「それ相応の代償を支払わないと」

少女はニンマリと邪悪に笑む。

「ああ、今から楽しみだわ。世界を救つたあの子にこう告げるのが、

その時の、あの子の表情が」

少女は堪えられないとばかりに言つていた。

「『貴方が救つた人は100億人よ、でも10兆人殺したわ』って
ね」

黒髪の少女は、タイヨウの持つてゐる蒼い石を見てそう呟いた。
空疎な虚空に乾燥しきつた笑いが響き渡つた。

12・黒の少女とペペロ（後書き）

更新が遅くなり、申し訳ありませんでしたM(、 、) M
では、コノハ s宜しくお願ひします^ ^

13・叶わぬ夢、願い（前書き）

「ノハです。駄文を一回も書かせていただくな」と云ふが罪悪感を感じながら……。どうや。

僕たちは座って、崖の上で景色を眺めていた。きらめく海と、涼しげな潮風。地面にそのまま座っているけど、やわらかい草のおかげでちつとも痛くない。空を見上げれば白い雲に輝く太陽。遠くを見れば、水平線があつて、空と海とが混じり合っている。隣を見れば、ソラが田を閉じていた。

「……うん、これが、潮風か」

僕の隣にいるソラが、全身で風を感じるように両手を広げた。

「気持ちがいいね」

「そうだな。……なあ、タイヨウ」

田を閉じたまま、ソラが僕に訊いてきた。

「なあに？」

「ずっと、このままいたくはないか？」

「……」

「ずっとこのまま気ままに旅をして、いろいろな街へ行つて……」
 そうだな、その街の伝統食でも食べ比べてみよう。おなかが膨れて破裂するかと思うぐらい食いまくるんだ。街を出たら、街道だ。あんな蜂が化けたようなモンスターは出てこなくて、わけのわからぬい使命に突き動かされて進むんじゃなく、ただ行きたい方向に、ただ気の向くままに歩いて行くんだ。危険もあるだろう。盗賊なんかが出るかもしね。しかしその辺は大丈夫。私は、人間程度ならいくらでも相手にできる。……それだけの力を、持つている

「ソラ、それは……」

僕たちが気ままに旅をして、伝統的な食べ物を食べ比べて……？
 そんな生活、できるのだろうか？ 僕がそう思っていると、ソラが目を開いて、僕を見た。もの悲しげな、切ない表情だった。

「なあ、タイヨウ。このまま使命も世界も何もかもを忘れて、ずっとこんな景色を見続けて、ずっとこんな景色のためだけに旅を続

けないか？ 街から街へ旅をして、ずっと、私たち一人で。もしかしたら何かあつて増えるかもしれない。増えた人たちがまた減るかもしれない。けれど、私たち一人が別れることは絶対にない。それは、私たちがそれだけ強い絆で結ばれているからだ」

希望に満ちた夢を独白するソラには、欠片も笑顔が浮かんでいた。
「……叶うことがないって、思つてているのだろうか。

「……もし、君がいいというのなら。そして私がいいと思つたのなら。このまま、どこかへ行かないか？ 全てを、忘れて。サポーターとか、世界とか、蒼石とか、何もかもを綺麗さっぱり忘却の彼方に追いやつて、私とお前とで、旅をしないか？」

初めて、ソラは微笑んだ。……でも、それはさびしく、悲しい笑顔だった。いつそう深く微笑むと、ソラは顔を僕の方から海へ向けた。

「……冗談だ。君はともかく、私が、この私が、サポーターの私が、使命を忘れるはずがない。逃げたところで、楽しみが訪れる度、罪悪感にさいなまれるのは日に見えている」

「僕も」

「？」

「僕も、行きたいよ」

自分でも驚くことに、気がつけば口に出ていた。ソラひとりに夢を語らせるのは不公平だと、思つたからだろうか。

「僕も、ソラと一緒に、一人でどこか、遠くに」

「……ははつ」

ソラは短く、僕の夢を笑い飛ばした。けれどその笑いに悪意はなく……むしろ、無理矢理笑つていてるかのような、そんな印象だった。

「まるで駆け落ちの誘いだな。ひたすら北を指して、逃げるのか？ そしてたどり着いた先で家を借り、働き、子でも成すのか？」

「素晴らしい誘いだな。だが、駄目だ」

ソラは短く首を振ると、一気に立ち上がった。

「ダメだ、駄目だ、駄目なんだ！ 私はサポーター、お前は世界

を救う『勇者』だ。役割は絶対、覆してはならない。……少し、私は血迷つていたようだ。たしかに、お前の誘いは魅力的だ。しかし、私にはやるべきことが、成さねばならぬことがある

さつきまでとは一転、ソラは強い口調になつた。けれど表情はさつきよりも悲しく、さびしそうになつていた。

「悲しそうだよ、ソラ」

「……！ つ、お、お前に何がわかる。私は、本来なら夢を語ることすら許されんのだ。さつきは少し油断したが、もう私は間違えない。私はお前をサポートする。そうしなければならない」

少し油断しただけで、あんなふうに願望が口についてしまうつて……どれだけ、寂しいのだろう。どれだけ、心細いのだろう。どれほど、現状が嫌なのだろうか。

「もう、何も心配はいらない。何も問題はない。……さあタイヨウ、先を急げ。こんなところで休憩するわけには、迷つてている暇は、ない！」

ソラがそう叫んだと同時に、海の一部がせり上がり、水柱をあげた。

「……な、なに？」

僕は思わず声をあげて立ち上がる。

「なんだ？ 何かいるのか？」

水柱がなくなるのとほぼ同時、僕たちを照らす太陽の光が、少し陰つた。

「……？」

目の上を手で覆つて影を作りながら、太陽を見上げる。

「……！ あ、あれば、なんだ！？ タイヨウ、気をつけろ……

いや、動くな！」

「え？」

僕はソラの方を見た。僕はソラに襟首を掴まれ、思い切り遠くに投げられた。

「うわああああああ！？」

「叫ぶな！」

世界が横向きになり、一瞬宙を浮いているような感じになつてすぐ、落下が始まる。地面に背中をしたたかに打ちつけて、着地。……痛い。

「い、いた……」

「早く起きろ！ 敵だ！」

ソラがそう言ひと同時、さつき太陽を陰らせた『何か』が、僕たちのいた崖にものすごい地響きを立てて着地した。

「な、なにあれ？」

「私が知るか」

僕たちの前に立ちはだかるのは、信じられないフォルムをしていた。

平べつたぐ、重厚な胴体。僕たちが視ている方が頭だとするのなら、あの中央についている一一つの丸とせわしなく動く切れ目は……目と口？ 目と口のある面の両端にあるのは、一一つの大きなハサミ。ものすごく強そう。巨大で重そうな体を支えるのは、左右四対の筋目立つた脚。全体的に堅そうな甲羅に……つて。

「……カニ？」

どう考へても甲の前にいるのは、カニの化け物に違ひがなかつた。……大きすぎて一瞬わからなかつた。

「カニ？ カニだと？ あのカニか？ あの、甲羅を割つて食べる？」

「た、多分」

さつき知らないって……ああ、そうか。ソラも、目の前にいるのがカニだつて信じられなかつたんだね。

「……つ。さつきまで食べ物の話をしていたからな。わざわざ食われるために出でてくれたんだな。食物の神に感謝しなければ。……神など、いるはずもないだろうがな！」

提げていたロケットランチャーを肩に構え、射撃体勢に入る。狙いを数秒でつけて、発射。煙を上げながら弾はカニの化け物に向かつていつて……大爆発。土煙が上がつて、カニのいたところを覆い

隠す。

「……よし。ようこベタイヨウ。今日はカニ料理だ」

「……食べるの？」

「食わねば死ぬぞ？」

でも、あんな化け物みたいなのが、食べたくない……。

「キシキシ……」

「え？」

ソラが驚いたような声をあげた。土煙が晴れると、弾頭を撃ち込まれる前と全く変わらないカニの化け物が、そこにいた。

「……はは。頑丈さも、化け物級っていうわけか。……もちろん、味も化け物級にうまいのだろうな？」

自分を鼓舞するように挑発するソラの頬には、汗が一筋、流れていた。

13.5 ノロとラッサ(前書き)

やばい。すこいせん遅れてしまつて……。
今回まち一病の提供でお送り致します、故。

「それにしても良かったのかい？ リュア……石の事は教えなくて？」

俺は、『輝石』のサポーターのリュアに問う。するとリュアは着ていた道化師の服を脱ぎ

顔の華々しいメイクを湖のお世辞にも綺麗とは呼べない水で流す。すると短髪に良く合うボーアイッシュな女が現れる。リュアは薄く笑みを浮かべ俺の近くへと座った。

「そう？ ……別に教えなくても大丈夫そうな一人だったと思つけど」

先程の小柄な少年と全身が白の服で統一されている少女、二人の事である。

「それに あれ位で死ぬんだつたら、今死んだ方があの二人のためだからね」

「……そうかい。とりあえず、何で道化師の格好なんてしたんだリュア？」

「別に。顔を見られたくないのもあつた それに「それに？」

「……今は良いわ。どうせ、願つてなくとも分かる事でしよう」

そうリュアが言うと、何かが飛来してくる音がする。

轟音。後方から聞こえてくる。疎ましい虫の知らせ。大雀蜂。それも俺より十倍はあるだろう、巨大雀蜂。それが俺達の方へ向かつてきていた。

見るだけで嫌悪感を覚える雀蜂。……吐き気がする。

「リュア」

「分かつてゐるわ。行くわよ、ルーク！」

彼女が俺の名前を呼んだ瞬間、『輝石』を天へ振りかざす。輝石は神々しい光を放つてゐる。

「……」

田を閉じ、意識を『輝石』に集中する。一步間違えれば俺とリュアはお陀仏。

失敗はゆるさせれない。

耳からは俺達を殺そうとする雀蜂の五月蠅い音が木靈していた。

「ふう……終わったか」

俺は安堵感から地面へとすいこまれるように、横たわる。

良かつた、生きられた。

俺とリュアの周囲に転がっている蜂。まだ蜂なら可愛いもんだが、何せ『化物蜂』だ。普通の蜂とは違ひ青紫の血をまき散らしている。不気味の一言。

「はあ……」

ため息と安堵の吐息。リュアも先程の闘いで力を使い果たしたのか肩で息をしていた。

たぐ、こんな時位休めば良いのにな。

この前そう問うた事もあったのだが、リュアはこう俺に言い放つたのだ。

「座つたら 二度と立ち上がりがれないから。生きるつて言いつのはこれと同じ事よ。ルーク」

……一体リュアがどんな人生を送つて来たのかは俺は知らない。だが、これだけは言える。

彼女は何かを失い、そして何かを得るために生きてきていたこと

に。

「よし。もうそろそろ、行くわよ。ルーク」

「何処に行くか、決まつてんのかよ？」

「食料があるところ」

「それは何処の街でもあるだろ？」「が

俺が立ち上がろうとした瞬間、猛烈な爆音と樹の揺れる衝撃で尻餅を付いた。

なんだなんだ？
襲撃かと思い俺は辺りを見渡すが、ここより少
し遠い位置で鳴つたようだつた。

音源は東 あの一人がいるところだつた。

13・5 ペロロと少年（後書き）

さあ 戦闘シーンを ペンシルさんへ丸投げDA！
タイヨウとソラのバトルシーン楽しみにしてますよー（#^・^#）

14・島と商人とソラとタイヨウと「眞実」。そして世界（前書き）

タイトルが長いとか言わないで。というか、戦闘が嫌いという私の特性を知つての丸投げですか。

皆様と比べて文章が劣化の一途をたどっていますが、ご覧ください。

14・島と商人とソラとタイヨウと「眞実」。そして世界

「逃げるつてど！」！？

「お前の思い出の中に！」

それでは現実逃避ではないか。
と、ソラに言う暇さえなかつた。

「あぱぱぱぱぱぱ！」

逃げる。というか、実際に逃げ切れているわけではない。すでに追いつかれているし、ソラが走りながら応戦しているのにもかかわらず、蟹の野郎がエヴァンゲリオンの「ごとくクラウチングスタート」でダッシュしてきたからだ。

「横歩きはああああ！？」

振り下ろされる鍔をかろうじて避けながら、走り続ける。そのうちフルマラソンにでも出れるのではないか。

「タイヨウ！ 石をよこせ！」

「はあ！？」

「石をよこせ！ これで撃つ！」

それ前使いかた違うって言つてたよね。

「無理無理無理無理！ ポケットに手入れたら死にそう！ なんか、転びそう！ 死亡フラグ！」

「大丈夫だ！ このままだとアイツは確実に私たちを殺す！ フラグクラッシャーだから大丈夫！」

「何が！？」

ええい、何も解決しない！ 僕は死に物狂いでポケットから石を取り出し、ほうり渡す。

「ホ……それは使い方が違うと言つたでしょ？！」

何かが、僕らの間を横切つた。ソラとの間に、蒼い石がないこと

に^シま^スる。

「ホホ……幸せに、よつゝそ」

音が聞こえなくなつた。

何の音が？

後ろに、蟹がない。

僕の足が止まつた。ソラの足も止まつた。

時間が止まつたような気がした。

しかし、それは気のせいですよ。あなたは、確実に今を生きていた

る
信じなさい……

一 何のこもりた

反射的に出た言葉たゞ二三句

「本……長ハ間生きてハますガ、命を助けてその……ハ様をされたニ

とはありませんねえ

「お前、僕の前に出て、なにがしたい。僕が、世界を救えって？」

僕は、世界を知らないのに……

「島の田覚め、なくば。勇者は島の一端となる」

卷二

景色が歪んだ。

声が反響している。

また、
なのかな。

振り出しに戻る？

「いいや、あなたは最初の一歩を進めてはいない」

「タイヨウ！ タイヨウ！」

「ああ、誰が叫んでいるんだ。見えない。手を伸ばしたい。触れた
い。消えたくない。」

「何を、バカな」

立ち上がる。僕はいつの間にか座り込んでいたらしい。
視界が、はつきりとする。

「おい、小悪党。お前、何が目的だ」「
自分の意思で喋っている。これが、言いたい。と。はつきり思つ
ている。」

「ホ、ホホホ…………これはまた、新しい名前がついたものです。
では、失敬しま……」

拳を顔に、埋め込ませる。なすがままに、行商人は殴り飛ばされ
た。

「あなたが何をしよう、私の言つことは真実ですから……信じな
さい……信じなさい……」

「また、消えた。」

「また、逃がした、といふべきか。」

ソラの緊張も、僕の緊張も解ける。

僕たちは何も言葉を交わすことなく、蟹のいた位置に目を向け
る。

と。

蒼い石……と、なんだろう。これは。

14・島と商人とソラとタイヨウと「眞実」。そして世界（後書き）

また自分のペースに引き戻してごめんなさい。

それはともかく、何が見つかったんでしょ？。音操さんにパス。

15・「」では無い何処かへ

蒼い石が光を受け、鈍く輝いている。そして、隣にある物……これは？

取り合えず、手に取つてソラと一緒によく見よ。じゃないと、なんとも言えない。

手に取つて良く見てみると、最悪の物だと言ひ風に感じた。

「……」

「……何と聞かれても……」

ソラと互いの顔を見合つ。何と聞かれても、これには一つしか覚えが無い。膝を擦りむいたりする時に見える瘡蓋。あれに似ている。つて事は……まさか。

「「血の塊……だよな（ね）」」

ドス黒い血の塊。見ただけで吐き気がする。何でこんな物が？

「どうしてこんな物が……？」

「わかる訳無いだろ。大体、これは見かけ騙しだ。ただ、『元に戻つた』だけだ」

「元に戻つた？」

「……感じるんだ。」この塊は“遺伝子的に私と酷く似てこる”

似ている……？

とにかく、落ち着いて考えよう。

ソラは、『サポーター』だ。僕の持つ『蒼い石』から生み出された
……悪く言えば、“造られた存在だ”。

なら、この蟹の化け物は？

あの蜂の化け物を倒した時には何も見当たらなかつた。……となると
…… アイツが関係している？

あの子悪党。胡散臭い占い屋なんかよりもずっと胡散臭い。それこそ、「俺の家はお菓子で出来てゐるんだゾ」など、言つ子供並だ。
そいつを倒したら、出てきたのがこの物体。

元居た世界のゲームのようだ、倒したら触媒になつた物へと戻ると
か。そういう類の物なのか……。

もしも、あの胡散臭い子悪党の能力がこれだとしたら。

僕達が今さつき相手にしていた、蟹の化け物の様な物を召還する力
だとしたら……。

ソラの恐怖はここから来ているのか。どうなんだろう？

「……タイヨウ」

「何?」

「行け!」

「…行け! て、何処へ?」

「ビーでもここ。…とにかくビー…」ビーでは無い場所へビー…」なん何も無い場所じゃなくって、もつと意味のある場所へビー…」

「…」

驚いた。今までも、感情を表に出していくソラを何度も見てきた。確かに見てきた。…けど。

ビーして、そんなにも苦しそうな表情でビーの塊を見るの?

ビーして、そんなにも辛そうな田の世界を見るの?

ビーして、そんなにも辛そうな田の世界を見るの?

「わからぬ。わからぬ。わからぬ。」

どうして。その言葉を並べたらキリが無い。ビーして。ビーして。ビーして。ビーして。ビーして。ビーして。ビーして。ビーして。ビーして。ビーして。ビーして。ビーして。」

どうしてビー? 一人で背負おつとしているのビー? 何かわかつたんなら教えてよビー?

…一人は同じ道を歩いていた。僕とソラはビーが違う道を歩いてくるのかもしない。

例えるならそれは、道と道路の様に。ガードレールみたいな物が僕達をわけているのかも知れない。

それでも……いつか終わりがある筈。僕は追いついてみせよう。いつか君と一緒に歩いて見せよう。

僕らは所詮、人と“人ならざる造られたモノ”。けど、そんな道理どうでもいい。

いつか……理解してみせる。

例え、君が君で無くなつても。

僕等は……ダカラ。今は歩いつ。どこへでもいい。彼女の赴くが儘に……。

「……そうだね。行こう。ここでは無い……それで入つて有意義な場所へ。……一人で」

だから、僕達は歩き出す。

潮風が吹き抜ける。新しい道を示すかの様に。

風が吹き抜けた場所を遠めで眺める。そうだ……今度はあの場所へ行こう。

そう……ただ、一人きりで。

一つだけ。

一週間ぐらい小説から離れていたりじつじつこうなった！？
ヤンデレじゃあねえか！？

・・・大丈夫だ！きつと大丈夫だ！次の人気が頑張ってくれる・・・
・そう願いたい。

そして、最近繰り返し言つのが多くなつてきましたね。
俺のスタイル、口口口口変わるな。

前回とは違い、割とシリアスに書いてみました。
と言つか・・・

最後のタイヨウの内心の台詞、女じやね？
ショタ×女・・・許せる訳が無えだろうが。
お次は a·r·i·s·h·i·a さんかな。
正直、俺の作ったフラグを粉々にしてください。そう期待を込めて
みます。
ではでは～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3081n/>

ソラとタイヨウのモノガタリ

2010年10月13日01時57分発行